

展覧会

武内明子「文無日記／風にねんかかると」

内海と外海とを
こいでいく



武内明子さん

武内明子は熊本市出身の32歳。少女のような艶やかな黒髪をして、身長は153センチ。私が知っていることはそれくらいで、まるで世界が彼女のなかをう通り抜けて絵が生まれるのかわからない。けれど、気にならなから

んかかるとは、寄りかかる、存在しない。両者ともに寄りかかりあい、内面を揺り動かすのは、いつだって外の世界なのだ。

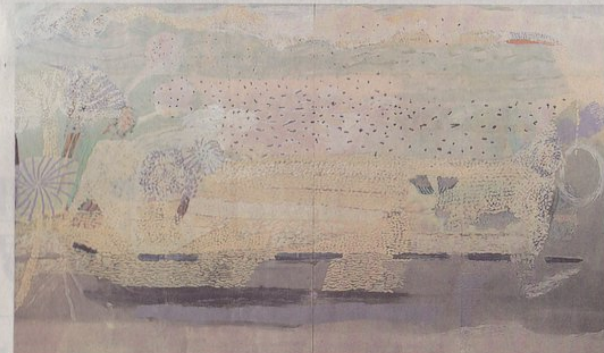
その一方で「津奈木にこびない」という気持ちもあって、ふり返る。「海がきれいだから、人が優しいからといって、そういう絵が描けるとは思わない。ただただ、とにかくいい絵を描きたい」という、画家としての矜持があった。

武内は新しいハネルに向かうとき、ゼロにすると言う。目に映る世界の形や色は、そのまま表現されない。だから心の水平線に顔を出す像のようなのを描いている。これまで私は理解してきた。日記を書くように描き留めるのだ。

しかし内面は外見なしには存在しない。両者ともに寄りかかりあい、内面を揺り動かすのは、いつだって外の世界なのだ。

帯在の成果を見せる展覧会で最大の作品「今度の舟は大きい」は、みずみずしく、美しく、明らかに武内の新境地を示している。白菊の花びらのような、白ハクリル絵の具の盛り上がり、連綿が影をつくり、ラベンダー色や水色、れんが色といった色の重なりが奥行きを生み出している。今夏、町内では毎日のように死者があった。その誰が何歳で亡くなったか、その都度有線放送で知られる。美容室で髪を切ってもらった間、そのことを話題にしたら、亡くなる人が続いたとき、ある集落では「今度の舟は大きかね」と言っただと教わった。舟が大きいから、いっぱいにならないと出航しない。すでに描き出していた絵を眺めていると、初めて聞いたその言葉が浮かんだという。「自分のなかを通過して何かが出てきたんだと新鮮な気持ちでした」

いい絵を描き上げたいま、次を見据える。「舟をこぐのにすくすくいいオールがあったのに、また初めから見つけないといけない、という感じかな」。静かに内海に戻った画家はまた外海にまた出たのだ。



「今度の舟は大きい」(縦228.5センチ、横368センチ)



三つの島を沖に眺められる町内の海水浴場で、雨に降られながら描いた「海に描きに行く」(縦182センチ、横370センチ)

いすれも作家展 撮影・小田崎賢祐

武内明子「文無日記／風にねんかかると」 20日まで、熊本市津奈木町岩城のつなぎ美術館(0966012222)で映像や陶芸作品を含め55点を展示。一般300円ほか、水曜休館。



